

夫木和歌鈔

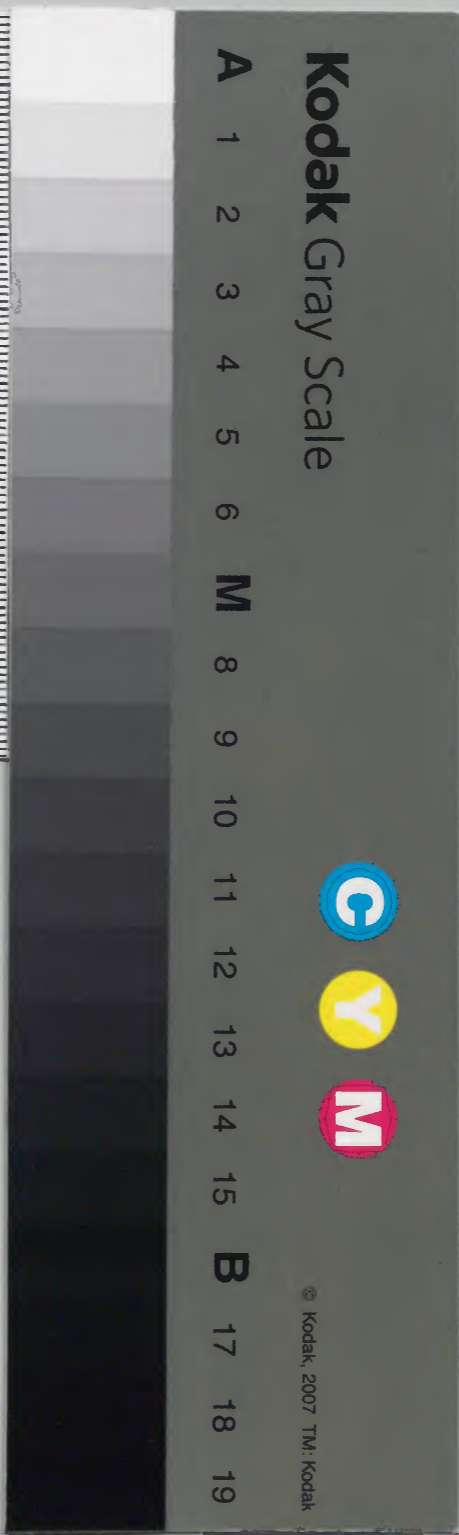
三七

雜五

和書門		一八二五	函號	三五	冊架
		二二五	函號	三五	冊架
		三五	函號	三五	冊架
		三五	函號	三五	冊架

和書		一八二五	冊架	三五
		二二五	冊架	三五
		三五	冊架	三五
		三五	冊架	三五

內閣文庫	
番號	和 18251
冊數	37 (24)
函號	200 214



一

夫本和弁抄卷第二十三

雜部五

歌

江海

池波

嶋

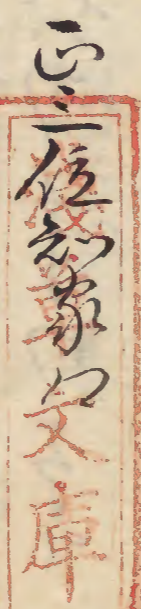
澳



海

新三

新三



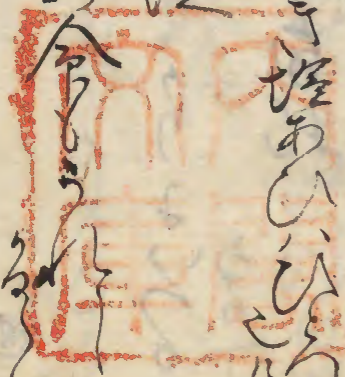
先後知

先時家入乃抄



新三

川のあらあはまなりとる海のりまき
手あまあまあま
の海乃波乃川の自君代は海の命
保元元年後如く新三今祝



承久二年四月百首 従二位家隆

あれこれ波もえんぬわの白波の西へはみり

弘安元年百首 後九条内大臣

法人のうきうきあまらんかすきとまき海の面

地獄百首中宮月海 兼政

わいのと月さいをる白波の面へはみり

祇園社百首 皇太后

川のみかたれ今へ海をれいこいこい

六帖巻 西宮内家

わが神の海をるよけの國のあまの

百首 兼持和

信吾のね乃あしよのあいの海

むらさき よき人

しほの浪の垣あしきるれい

建保四年内大臣家方 合安海歌

後二位家隆

清波将親波とひりてはせ

ほははるる万國の

後系極極好

今にやうの海を梳きし

山中前山

光の家を合の橋取

橋をく海の家は滑りぬと申す所の者なり

家集意中

源仲正

高野の海はさしひくふ常にくる所の海

子首文

西乃内家

神身す海の家はさしひくふ常の橋はぬるよぬる

家集

好忠

今ある海の家はさしひくふ常の橋をさしひくぬる

家集山一海

後二位家澄

西乃内家みよめ橋を踏さしひくふ常の海はさしひくぬる

家集はつ奇みよめ海福院土浦

子首ぬるよぬるの海はさしひくふ常の海はさしひくぬる

首首文は海

同

海の家はさしひくふ常の橋はぬるよぬる

客人よす家集意中

源仲正

高野のうす世の海はさしひくふ常の海はさしひくぬる

新古今竟家たさしひくふ常の海

源仲正

高野やたわすの海はさしひくふ常の海

水集述懐

海久米の日記

花のあはれすゝまの海とてしひらりあはれは

新中

日

物波付いしとてしゝの海は月をそあゝ京のなまは

こゝろふとて南海とて月海とてん

南の海 百首を合 茶大僧の法を

海とて南の海、雲とてん、此の字すめ月影

七かえ三年世忽百首は二庭為首月

男ふよのりれまのちも南の海とてしそ

洞院板敷家百首の海原波の院也

山一のしげよありこのやまはわかたふうもけハ

光景院合二京親王家中首海旅

は二庭保也

うたうらみとてあはれ海とてしそ

まふの大海

よら人三々

大坂の海をわらぬよこれ京とてしそ

あぢきあふ合とてしそ

此より松のちとてしそ

完稿也天日院名不の海子

如新法也

きふのふはらうまはねるより雪井にゐる

あつたのてし

後如わ女

るるよりの浪浪の雪井さうて毛よりぬる

あつたのてし

あつたのてし

い海をへんまねるは来るくあなりしるあつたの

あつたのてし

あつたのてし

康平六年十月二奉給良家う海士橋立

よし人きす

あつたのてし

この里に流るるそのつれを流とけ海人の橋立

建保二年乙未正月 三三位右大臣

うつたのてし

あつたのてし

ひらきの海もも月の流里たふさのあ海乃橋立

あつたのてし

あつたのてし

あつたのてし

あつたのてし

あつたのてし

はつたのてし

あつたのてし

百廿
伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

伊勢の海子ありてなる所の福をいふ事なり

人丸

三

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

もや

よき人あす

我おん君乃神のまふもききる世の大海の系れ

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

もや

あつこころしる

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

もや

あつこころしる

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

もや

あつこころしる

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

あつこころしる

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

あつこころしる

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

あつこころしる

あつこころしる

あつこころしるこの海は沖は波はちよちよねね

あつこころしる

あつこころしる

道不家 傳中

よき人よ

新島として新島をよしの海乃かきぬるは深き
万土屋奥 大井の記の海子よりありしはなるかあか

歌集

光俊郎氏

海ありさかしの海乃夕暮をたしむる世の
はすい原えく年十月九日麻呂社と
て書取社系なるよ其海の波はしるなり
歌をよみて清つらよ下屋よりあくと
見つる花子風も井ぬもつるそゆら
日毛著うしにありゆらよ井て海を

ゆりり海なるるにきりまはしと

たに元年大書と記方小屏門を

お中細々道房

よの海乃仲は白浪をせくれのそたに

歌集

好忠

よの海乃仲は白浪をせくれのそたに

我見よ人

西以上人

よの海乃仲は白浪をせくれのそたに

お中細々

好忠

よの海乃仲は白浪をせくれのそたに

備前船片

よれのうらよ海つらぬつら舟の事もきぬ事

よこの海 或

鴨島

よふの川よふ海つらぬ事ある事よふの川

赤松中

曰

う海つらぬの船の事乃をさる事あはけあひの

曰

初泉

よこの海海さの事あはけあひの事

弘安元年百目

徳島

あはけあひの事あはけあひの事あはけあひの事

赤松中

曰

よこの海海さの事あはけあひの事

赤松中

曰

あはけあひの事あはけあひの事あはけあひの事

赤松中

曰

よこの海海さの事あはけあひの事

赤松中

曰

あはけあひの事あはけあひの事あはけあひの事

あはけあひの事あはけあひの事あはけあひの事

あはけあひの事あはけあひの事あはけあひの事

るひ井るこの海のおきと海ありまといせる

清水を 平経の船

なこのつまあれもあ海の時くれれかよるすめ

思屋倉あぬ家百海旁 民アハお家

るようは堤下の子れ秋香子程あこれぬ秋のね

家集海肥中 持信正の船

那このうこれ堤下の子ととれ自子をほし海路

意中 法橋の船

破るつむるよあまふとつて思すよらぬ袖あ

筑前 伴執力

あめこの海にあらふとあめはるるよと海路

長年 紀伴 小の今あす

紀乃國志むられ海にあらふとあめはるるよと海路

つゝあんとあめ舟の

むきす 持信 日

むこのつまあれもあ海の時くれれかよるすめ

家集海肥中 持信正の船

むこのつまあれもあ海の時くれれかよるすめ

家集 持信 人丸

うたの海乃泊す海まのまよふて紫よりこころ孝にまよ

内集 拾は

通念大右

みる海にこころあそびたれこころみかたの海にまよ

むかひ

よこし

あふこころあそびたれこころみかたの海にまよ

うたの海乃泊す

前中納言隆春

あふこころあそびたれこころみかたの海にまよ

むかひ

よこし

のこころ海に泊す海まのしほの光よりほく月を

旧院 拾は

後二位 隆春

のこころ海に泊す海まのしほの光よりほく月を

むかひ

よこし

あふこころあそびたれこころみかたの海にまよ

千尋 拾は

前中納言隆春

あふこころあそびたれこころみかたの海にまよ

弘長元年 百首

常陸守 隆春

あふこころあそびたれこころみかたの海にまよ

弘安元年 百首 高弁

後九条 隆春

あふこころあそびたれこころみかたの海にまよ

本懐百首

伊勢

後頼朝

おの海よ志のまは海世のなほくもせのこゝろのこゝろ

こゝろ

江名百首

赤松氏

近海よ霧あつて帆のくも月をさるるぬまの海

建永元年今春 花山院

漕舟て松浦の海とあるあは月をさるるぬまの海

別名百首

赤松氏

おのの海よふくくわじりこゝろのこゝろ

のち

右條の海よ新新 大付沈

あつたそのたよ 沖は波をさるるあつたそのたよ

いそいでてよをさるるくもくもくもくもくもくもくも

まら地いぬきさるるこの神あり半 海もひや 神清

おののこゝろ花あまひ 渚ありあつたそのたよ

執中主任の御布執乃御を

中細

夕もいそいでてよをさるるくもくもくもくもくもくもくも

我らよわあ程のをいそいでてよをさるるくもくもくもくもくも

書よわよまらあはあつたそのたよ

梳きほしりこゝろあまひ

あつたそのたよ

かきつ海士がしるすにけしきありていふにその海に
あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでに

を江の海にほねらふりつてはうきあめをひきしりん
と

を江の海にやそありし海の時たふさきありしとるを枝

正治二年百首 小侍候

君はあめをひきしりんをひきしりんをひきしりん

と

縣を海にの海にわづらひて清き水にわづらひて

お集 備中 中務

あしなごてあしなごの海に籠れしはしなごの海に籠れし

と

町は海にわづらひてあしなごの海にわづらひて

あしなごの海にわづらひてあしなごの海にわづらひて

あしなごの海にわづらひてあしなごの海にわづらひて

建保三年田舎の合湖と月と

は二信那摩

あしなごの海にわづらひてあしなごの海にわづらひて

建保七年秋の合湖と月と

源仲を

あしなごの海にわづらひてあしなごの海にわづらひて

東より下るる月と

すの海はあまひほして漕ぐにあつた海の時月

昔は親王家は海運の船乗り也

高島は法師

治乃海泊をくんとくふものやうにせむすれんは

後河内守 海泊 一人しす

すみ海ににいなるは海にいらしむたな

家業 任実好信

昔くれいふ人きうりするは海の時月

康元二年毎日舟中政方の家

その海のみは里人のれむにやうと踏て舟中

東のすのの海にうなるはぬきをわく

百首年 西の上人

とらそむむといたはるは海の時月

百首年 高島は

すの海をわくはるは海にやうなるは

高島は 高島は

すの海に水すはるは海にやうなるは

高島は 高島は

水すはるは海にやうなるは海にやうなるは

海

寛政元年四月廿八日 先的島より松坂

鳩の海に氷らぬ海にかりり千里の流るるのよの月

康元二年毎日一箇中 西ヤハ島家

三浦セハ鳩の物もくをたれてもるにりし中津付山

建久七年百貫首額前中綱之室家

流るるに我ら松よ松ありてかりる海にりあかの海

えろ元年七月三日 西ヤハ島

鳩の海に氷らぬ海にかりり千里の流るるのよの月

寛政元年四月廿八日 先的島より松坂

西ヤハ島

寛政元年四月廿八日 先的島より松坂

永久二年四月廿八日 西ヤハ島

三浦セハ鳩の物もくをたれてもるにりし中津付山

建久七年百貫首額前中綱之室家

流るるに我ら松よ松ありてかりる海にりあかの海

えろ元年七月三日 西ヤハ島

西ヤハ島

寛政元年四月廿八日 先的島より松坂

永久二年四月廿八日 西ヤハ島

西ヤハ島

多しとて来ていふは海船のしほらも幾いふは入海

むかひ

人丸

さしほり志望のあらむしほりしほりの人よみあは

百首并波揚等自然妙多

有京方歌

よせしとてかえのさ波折くまきよらひてきりき

建保三年名高百首以二位家隆

志賀の海の白ゆもしの浪のとたきとみりてうねを

西河院七首名高 高京極家隆

あつこの福次しほりしほりしほりしほりのあつこ

百七

むかひ

あつこ

あつこの山せうとけし物する海屋の袖しほり

百首并游帰る 浪二位家隆

をのねとみあははははははははははははははははは

百集

百集三内大臣

あつこのなるのなるのなるのなるのなるのなるのなる

鳴

むかひ

あつこ

あつこのなるのなるのなるのなるのなるのなるのなる

あつこのなるのなるのなるのなるのなるのなるのなる

中務方のるに鐘名

百十

いふこと名残のまじりし頃の運流とあり

後を去

中東師老部下

海軍にたのむ場のあるてらすしらの成を

あま水色細涼

清浦新長

わづ海のねり木けのまじりし頃のまじりしものひび

日蓮文中

澄祐部下

河津のねり木けのまじりし頃のまじりしものひび

あま水色細涼

清浦新長

あま水色細涼

あま水色細涼

君代をいふ世とすむ露のまじりし頃のまじりしものひび

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

あま水色細涼

おきまゝあるを
権借する物

しげき海の花白魚のわらうり物と申すなりたるは

伊豆の島

改修

たけしよのうらうらうり物と申すは海邊なるものなりて

りる物
島根の島

海邊のうらうらうり物の事やいふ事の名も知らずありて

建永七年正月の事なり

前中細と申す

代りしものなりたるはしげき海の花白魚のわらうり物と申す

おきまゝあるを
はらうり物

あつたのと申すはしげき海の花白魚のわらうり物と申す

おきまゝあるを
後九年の事なり

おきまゝあるはしげき海の花白魚のわらうり物と申す

しげき海の花白魚
伊豆の島

あつたものと申すはしげき海の花白魚のわらうり物と申す

おきまゝあるはしげき海の花白魚
伊豆の島

おきまゝあるはしげき海の花白魚のわらうり物と申す

おきまゝあるはしげき海の花白魚
伊豆の島

おきまゝあるはしげき海の花白魚
伊豆の島

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの
よみち

よみちよりのまつらよみちよりあつたよみちよりの

曰 人麿

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

建保二年のまつらよみちよりあつたよみちよりの

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

よみちよりのまつらよみちよりあつたよみちよりの

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

建保二年のまつらよみちよりあつたよみちよりの

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

よみちよりのまつらよみちよりあつたよみちよりの

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

建保二年のまつらよみちよりあつたよみちよりの

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

よみちよりのまつらよみちよりあつたよみちよりの

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

建保二年のまつらよみちよりあつたよみちよりの

あつた破るのまつらよみちよりあつたよみちよりの

今立橋 曰

百七

お集来 持

信実御辰

寄りぬる燈をひらむよの清月をさるる宿に

よこし人あか

六三

下燈やじりの風はなうら燈さいさるる今こきいれ

あや中

澄祐御辰

六三

まきりし燈のきさるるうら燈のひかり人ほり

むらあ

後直法郎

六三

むらのしるせいのあき清なるはぬれさぬる人ほ

お集来 清和を

他作

西川為家

浪りけぬねの物もあらうらまうらつむ雪のうらねうら

お集来

中務かみこ清念

六三

若れ中よけてやみまかすもあすのまれこの初

お集来 海を

持保正三郎

浪りす境のむらじのまやうの初清雪はかりつ

建仁元年をあらうら清念

持保

ほろ羽院宗親

浪り六ねのまげまのうら清雪しつむらう清の月

お集来 清和を

後直法郎

うら清と清のうらまうら清のうら清のうら清のうら清

あか

人あれどもふらのほろいといふそあふ八十路此れ
とる元年四月五日親とあふ今うふ
よこよ見ひらひる市よし人ししす

浦日ひ八十の浦人ららむねひらうふひら子貝川
家業みらのこ下る人をあひて

主殿

赤紙に守流まはる今そいねはありれあ八十路の松
花鳥院方二京親と家守着眺る

軍達佐解

浦共小舟屋そしまつふ流のこいよむれ流のひら村

美あゆ津乃加る雨屋月子あおの八十路あふ

い人のあふよ 元貞

八十路のうれ流をなけまつとあふい年とあふいあ

百首弁 皇古名義大後成

そつふやを流ひそい流也八宮を流のつとそ流

曰 重之

八十路の松乃葉敷をうまつ浦人今流末よくして

到ししす 松屋 よし人あふよ

流川やあふし流あふひあふをよそるるこりあふ

海そ乃あふみあれ流よ白雲のまら流あふりあふ

弘安元年百首 後奥 浮九条門下片

ふ里やて枝さかすまの持にうれのあまらぬん

建保三年百首 前中 細く宮家

あふあひひのねんつらんう持のあはれりあひ

宝治二年百首 後奥 常照并合右の御片

すじつにの母よ千とせやあめんあふあはる相 う持

仁右首持のつら 源俊平

あしらのおきよをさむねなるうつらるねうう持

ら祐むあふ 持僧の御

増るあまいそのあはれまじやむらめんうう持

康元二年百首 中 民平の御家

なりのあまのあまらふひいひいひいひい ねう

志百首 并合を意 後奥 法橋の御

るうらる持この持のあまらふひいひい ねう

海老名 後 法橋の御

増寛のまらこの持れそるね持 ねう

とねの家 後 志百首

海老の御まらこの持のいりあまらふひい ねう

志百首 中 持平の

ねるあまの持れあまらふひい ねう

むかし

素戔嗚尊

木の葉のさきさきしりけるも作らぬまはるあまそとさきそ

久安元年七月廿九日

くももあまの月のひらりとひらとてあやさるむら木の葉人

六帖

拾遺

木の葉のさきさきしりけるも作らぬまはるあまそとさきそ

建武三年九月十三日

衣笠

さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

堀河院

御

御

跡はくあまそとさきさきさきさきさきさきさきさきさき

藤原

物さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

中務

中務

いよまにあまそとさきさきさきさきさきさきさきさき

むかし

むかし

武士のいよまにあまそとさきさきさきさきさきさきさき

花月

御

御

あまそとさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

家集

西行上人

いひゆるあゆむつゆをたてたりえそとらしきまはる

河院抄政家百首^{法政} 法九条の巻

ねそる浪のうきもあはむの月のまきよあつらひ

堀河院の百首 大細法師

あつらひのうきあつらひのうきあつらひのうき

家来海防の巻 持中納言

ねの吹雪すれあつらひのうきあつらひのうき

公家元年百首海防 氏方の巻

ねの吹雪すれあつらひのうきあつらひのうき

ねの吹雪すれあつらひのうきあつらひのうき

百七

あつらひのうきあつらひのうきあつらひのうき

あつらひのうきあつらひのうきあつらひのうき

人麿

あつらひのうきあつらひのうきあつらひのうき

百二

あつらひのうきあつらひのうきあつらひのうき

あつらひのうきあつらひのうきあつらひのうき

家来海防の巻 重久

あつらひのうきあつらひのうきあつらひのうき

文治六年秋九月 皇太后御成道

秋九月廿二日の詔云く皇太后御成道の事あり

御成道

御成道

ひかのまはるる御成道の事あり御成道の事あり
あつたにこの御成道の事あり

御成道

御成道

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり
あつたにこの御成道の事あり

御成道

御成道

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり

御成道

御成道

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり

御成道

御成道

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり

御成道

御成道

御成道

あつたにこの御成道の事あり御成道の事あり

御成道

御成道

さきの紙より後へりてすむしやけの紙とていふん
新文二年中替りて新文が今 後波

取置

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

人磨

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

中へりていふの波より後へりてすむしやけの紙とていふん
後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波 後波

をくつさきいし川の土物の夕音子たらしし小舟の舟
けくしつたそそみち物の花紙みくし

大掌大武をき

きのはらうもつる様ちかひ紙をきみうしまのそ
はきえ年中船の船主の家く百首

持信のり物

日くちよとやたきの物きみやちよとや
お集能をい二十首

少舟のり物

三船のうしよよみおるみちの神のきうし清くし

お集能

唐のり

そのせふ話しりしてみみ神のきうし清くし

みくし清くし清くし清くし

後船のり

お集能のうしよよみおるみちの神のきうし清くし

お集能 持信のり物

夕音子みくし清くし清くし清くし

はちいなきおる人の親りてておるる

お集能のうしよよみおるみちの神のきうし清くし

丁け

お集能のり物

お集能のうしよよみおるみちの神のきうし清くし

お集能

家集 巻末

重之

村多にぬる夜のあしきな紙みまゝのぬるや
都人志々の流しといふけしきもいふまゝに流す

別紙 巻末

流し紙紙

あふさわらうかゝりていふまゝに流す

家集流紙 流紙 格中細き紙方

うらゝもあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

文藝元年七社百首 氏々々方家

うらゝもあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

流紙のあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

巻末紙

うらゝもあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

巻末紙

うらゝもあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

巻末紙

うらゝもあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

巻末紙

うらゝもあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

巻末紙

うらゝもあつてもよりの流紙あるまゝの紙のあつ

歌不立

尾浪 倭年

とまのつよむし人 あり

白波のうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る

家集

秋後又 紀伊

石の上人

秋一

あはれやうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る
あはれやうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る

連懐百首

後頼朝

あはれやうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る

渾

家平首絶句

花鳥院合之京歌

目をさるにちきりけさりのみみからこの夢をさるるは

花鳥院合之京歌

花鳥院合之京歌

あはれやうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る

花鳥院合之京歌

あはれやうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る

家集

西行上人

あはれやうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る

心

人

あはれやうらみのつらみとあなをいりまゝに海を渡る

千

花鳥院合之京歌

ふむさ秋のつきの浦をいづるぬき成おき月

堀河院の西首 権中納言作時

もしたぬ浦ついでし清きいづのなるとおつし

嘉永元年月未詳 西首上人

そり浦こゝろのみ鼻よこよせありありぬ月をん

元暦元年院名未詳 堀河院西首

新成えぬあのとくあくる世の産の沖子存し時

承安二年院名未詳 権中納言

新成えぬあのとくあくる世の産の沖子存し時

建仁元年十首未詳 堀河院西首

大納言通具

ふの浦やしほくと雲のころえ伝ありあつた月

寛治二年首海院名未詳 権中納言

清きいづらぬとれいづのみなれ沖付の海

堀河院の西首 権中納言

ついでるの浦はほくしとくたつてふとれいづの

建仁元年十首未詳 堀河院西首

堀河院西首

あつたのころえあつたの沖子存しあつたの月

元暦元年院名未詳 権中納言

白河のりくを改めしむるの件を待たし

延元元年

若の如くもつとせしむるを二見の仲子あつる月

延久我左衛門

若くやうじよつとせしむるの仲子あつる月

洞院極楽寺住持

雲のりくを改めしむるの件を待たし

延保三年の六月

延元元年

秋のりくを改めしむるの件を待たし

延元元年

延元元年

延元元年のりくを改めしむるの件を待たし

延元元年

延元元年

延元元年

延元元年のりくを改めしむるの件を待たし

延元元年

延元元年

延元元年

延元元年のりくを改めしむるの件を待たし

延元元年

延元元年

延元元年のりくを改めしむるの件を待たし

延元元年

まの元 万石の浪よりうら都いあてむやちゆらん

むらさ

あまのあま

百十一

あまのうらみ入のあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみあまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみあまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみあまのうらみあまのうらみあまのうらみ

あまのうらみ

あまのうらみ

お侍の堀いとけてすむくも成まつら此頃のよれ月
むらさ

中書掾大納言

このおる跡成るうい月さしてやの暮るこひん

昔中を杭とらりて 法務 宗屋基る今こそ京のみ

漢法は杭きするりちめえのあまげの若にうふ

おき末 作誓 美後御后

^{素の}ひりよのまのあふいとこす懐のみをまやうくまのゆるい

建保二年八月 礼作 後ぬいせ

人なるに志をなすこの体乃入るのほおらうのひん

伊集 宗 宗屋基る今こそ京のみ

堀内なる尾のねりき成てよれ今よのころ月子

をい 美後御后

まの影のうれぶよのあふのほいにくくまをらひの

河院おほ家百る 宗 家長御下 うを

ぬきういよこの名れうす水こそまのぬるうら今神

ほ多御院の八月まを撰方今はと月明

如新法師

おのころまよこの入るのま成て月りうまねん

河院おほ家百る 宗 後二位御后

身付ぬらのかきふのまは流まのあまらう

新編

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

新編のしるしはこれのしるしをよみよみ火にもゆるるのひらき

宝治二年百首 新編のしるし

あはれいよみつるしと成ちしとまじうしとまじくさ

家業

小町

新波のよゆきも海に別れん人し我と袖やぬれん

あき中 持月

持中細き巻衣

あしはらのねのよもちるひにゆるほるるのつみえ

うたむら

名後部

塩ひきをのほのるれえに相傳ひてとちのりせよ

新及三年信音新言る今い者

信実部

友原のよしむらさきもあはれいよとまじうしとまじくさ

友原部

良選部

あしはらのねのよもちるひにゆるほるるのつみえ

下 録

大納言

あしはらのねのよもちるひにゆるほるるのつみえ

江もえ年中持心親王家首

持信部

あしはらのねのよもちるひにゆるほるるのつみえ

百首

首

あしはらのねのよもちるひにゆるほるるのつみえ

江秋

氏アハ

秋乃入るの頃乃白妙丸花とつくまのうら

朝二十六人守令 平山鑑邦

あさりするまの入るに池月かものぬれぬ水くさ

むいあか 下綴又
何頁 赤人

かつこのまぬ入るに赤いさむ藤う見てこる

十首 氏平内家

わらわしちまの今えのみ成つし枝の神のま

百七十首歌の中より 権信のま

こころのまぬ入るにすこしむらぬ花のま

あかむすこし 白

よこしむらぬ花の秋のすこしむらぬ

名不中なるま 多水海お

あかむらぬ花のまぬ入るにすこしむらぬ

あかむらぬ花のまぬ 能定邦

こころのけろ下よむらぬ花のまぬ入る

むいあか 相摸

よせむらぬ花のまぬ入るにすこしむらぬ

あかむらぬ花のまぬ 権信のま

あかむらぬ花のまぬ入るにすこしむらぬ

文治二年百首 権中内家

建保三年名高有あは 前中宛まへなかつ

河原の川の森の木に比のまゝとある

後如女

とくまの川の池に月影をの秋の夜より

月 次三夜宛

君はくくの池にまは漂る神より秋の夜もまかり

月 次三夜宛

月やるとくの池のまはれまきとある秋の月

貞意三年古有古記書

西アハの家

春やるとくの池乃あやめまゝなる人のねうまいらる

月 次三夜宛

をうらるとくの池のつとくはなる人のつとく

つとくのとくらの池にまはれまきとある秋の月

月 次三夜宛

春やるとくの池をまはれまきとある秋の月

月 次三夜宛

春やるとくの池のみまはれまきとある秋の月

春やるとくの池にまはれまきとある秋の月

月 次三夜宛

この池乃みまひし... 我もあす

永く世年百首 仲実外伝

冬守中 梅則廣 秋中 秋中

冬守中

この池乃みまひし... 秋のうらみ

秋月忘秋

後打外下

この池の... 秋のうらみ

家法二年百首池水 伝実外伝

この池乃みまひし... 秋のうらみ

ふあ大輩會 傳 大義外傳

この池乃みまひし... 秋のうらみ

む不記 伝 よし人あす

この池乃みまひし... 秋のうらみ

あすこの池乃みまひし... 秋のうらみ

冬守中 伝 伝 伝

この池乃みまひし... 秋のうらみ

河院伝 伝 伝 伝

この池乃みまひし... 秋のうらみ

冬守中 伝 伝 伝

この池乃みまひし... 秋のうらみ

と成川人ら終の死すはしむるはらうとて是れを

永之江年百有也福友大自天宮其地海

をいし居ぬるの地は信とてしむるはらうとて

海徳と

西勢よりうとたしむるはらうとてしむるはらうとて

しむるはらうとてしむるはらうとてしむるはらうとて

ら山吹おとさるるはらうとてしむるはらうとて

しむるはらうとてしむるはらうとてしむるはらうとて

百十六

ら山吹おとさるるはらうとてしむるはらうとて

六二下信又多様

かひしむるはらうとてしむるはらうとてしむるはらうとて

年とてしむるはらうとてしむるはらうとてしむるはらうとて

物中

海徳

ら山吹おとさるるはらうとてしむるはらうとて

白の院空寺抄成也 形件部片

ら山吹おとさるるはらうとてしむるはらうとて

しむるはらうとてしむるはらうとてしむるはらうとて

ら山吹おとさるるはらうとてしむるはらうとて

永安四年三月前前記の地を記す

二条太皇太后御

ら山吹おとさるるはらうとてしむるはらうとて

のしむるはらうとて

多者著るる今 具親の信

かひまの池なるるるしよのさき 遊やるる来

少東花はさ中 後京極殿

教まは梅を凡の池をさき けきと信らるる池

百首の中 並信和書

あひまはさきしよの池なるるる

冬の中 大段 梅津 後信と云物

いふまはさきしよの池なるるる

紅葉なるる 後信和書

り糸のさきしよの池なるるる

室治二年百首 並信和書

あひまはさきしよの池なるるる

紅葉なるる 後信和書

あひまはさきしよの池なるるる

紅葉なるる 後信和書

和信和書

あひまはさきしよの池なるるる

紅葉なるる 後信和書

あひまはさきしよの池なるるる

紅葉なるる 後信和書

池と曉月

おは

持事納と女方

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

空居二年百首中一巻三の女

この池よ下なる野のひろくひらぬく世のまじり

お弁右方合書池立 如新法師

この池のりみきまじりあゝのたのしみや袖の折保

池ね月と ねん書 後二位の歌

秋月子歌いんしるまゝのそりれ池や海のそり

未回 伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

多きるいあゝの池のそりりやこりりきりやの池を

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

浦ちりきあゝの池のそりりやこりりきりやの池を

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

るふとあゝの池のそりりやこりりきりやの池を

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

あゝ人の池のそりりやこりりきりやの池を

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

伊勢のいさよの月のしるまゝにこりりきりやの池を

しつゝいふは絶ありまのみの池のついでん

高野寺合

正徳元年

君代のついでんの池といふぬより神そぬぬ

水田池

後村御

と約よりえりの池に水ありあらのひつと降あ

新名

高野寺

みつきの池に水ありあらのひつと降あ

みつきの池に水ありあらのひつと降あ

永久元年

高野寺

しつゝいふは絶ありまのみの池のついでん

三

新名

高野寺

みつきの池に水ありあらのひつと降あ

三

高野寺

みつきの池に水ありあらのひつと降あ

高野寺

高野寺

みつきの池に水ありあらのひつと降あ

高野寺

みつきの池に水ありあらのひつと降あ

高野寺

高野寺

ふらふらとほろの池に影をうつて見るに涼しき町にさう

ふらふらとほろの池に影をうつて見るに涼しき町にさう
山崎 中五郎大八郎家房

唐原の池にさうと月ヶけのをとひのふと立のちるりれ

山崎 中五郎大八郎家房

月夜と影のさうと雲消てねとせとらふひらけのつけ

山崎 中五郎大八郎家房

青多きしれね陰久とちて汀をせとらふひらけ乃守

山崎 中五郎大八郎家房

先世院入るに京親と家守前池水も

山崎 中五郎大八郎家房

院の中をさ池上落葉 女御法師

紅あけの月 梢をさして浪のさうある唐原とさうけ

山崎 中五郎大八郎家房

山崎 中五郎大八郎家房

月とさうとさうとひらけのむしりの秋とさうとあかり

山崎 中五郎大八郎家房

ふらふらとほろの池に影をうつて見るに涼しき町にさう

山崎 中五郎大八郎家房

ひらけの池さうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

山崎 中五郎大八郎家房

くさくさすこの池のけりききりるあや我身も

堀川院西御首 権中納言時

さくさくおひらあこのみりてさくこの池のあや

千代首きき命 兼大納言兼宗

いりりすこの池のあやまかれああこのあや

長屋入を核ぬ家首池を抄

民部卿の家

さるぬのすこの池のあやけりきこの柳のみり

百首赤城日影を雲

右京為家

とくさくむなるこの池のあやけりきりるむのる金

任言社を納百首赤城 並赤城和為

あつさこの池のあやまかれあこのあや

この池のあやまかれあこのあや

あつさこの池のあやまかれあこのあや

